【書評】

鄭　黄燕著

『都市化の中国政治－土地取引の展開と多元化する社会』

（名古屋大学出版会、2023年９月、
iv+261ページ）

「おもしろかった」というのが本書を一読した後の感想である。

それも当然である。本書は第45回「アジア経済研究所発展途上国研究奨励賞」（2024年度）の受賞作品であり、すでに高い評価を受けているからだ。

評者も都市化について各地方で調査を行い、現地でいろいろ話を聞いてきた。これまでの評者の断片的な知識が、この本書によって整理され、理解が深まったのはありがたい。

本書の構成は以下の通り。

序　章　変革期中国の都市農村関係
第１章　揺れる都市農村の境界－都市化の制度と政治過程
第２章　農業用地の収用をめぐる協調と葛藤－国有地使用権商品化の波紋
第３章　事業用地のゆくえ－交渉の成否を分けたもの
第４章　住宅用地をめぐる攻防－住宅市場と村民の利益確保戦略
第５章　都市化のなかの村民委員会－二元構造の変貌と社区・都市財政
終　章　多元化する中国社会

本書の目的は、土地取引の政治過程から都市化の社会変動を明らかにすることである。

具体的には、誰が損／得したのか、誰が交渉したのか、誰が土地利用を変更し都市利用を進めたのか、という「誰」に注目し、中国の都市近郊における農村部の土地取引の政治過程を分析し、都市化によって社会がどのように変動していくのかを明らかにしている。

本書の内容を見ていこう。

序章では、中国の変容する都市、農村関係を概観し、都市農村という二元論に疑義を呈し、都市化による制度変化､交渉アクターを整理し、本書の調査地や構成を述べている。

第１章では、計画経済時代から市場経済時代への都市農村間経済構造の変遷を整理する。都市農村の主要な争点は、計画経済期は農産物の生産と都市への供給、市場経済期は農村部の土地収用に変わったとする。

第２章から第４章までは、土地用途による政治過程の多元化を現地調査から明らかにしている。

農業用地（第２章）：農地収用をめぐる都市農村間の取引は、1980年代には協調的に進められたが、1990年代以降は対立が生じ、2004年以降は中央政府による調整と新たな葛藤が生じたとする。農地収用過程において都市政府が主導し、デベロッパーと利害を共有するようになった。

事業用地（第３章）：村の事業用地をめぐる都市農村間の交渉過程を「都市を作った村」「都市に吸収される村」「都市と協調する村」の３類型に分けるとともに、都市化時点ですでに不動産開発を行っていたかどうかが村側の利益確保に大きく作用していることを指摘する。

住宅用地（第４章）：住宅用地をめぐる都市農村間の交渉は、農民が前面に立つ場合があるのが特徴である。また村民委員会が都市政府の実行者になるか、村民の利益共同体の代弁者になるかは、村の集団所有資産の保有形態と関係しているようである。資産を持たない場合、村民は個別に交渉し、最終的には都市側の規定で住宅地を差し出すことになる。

第５章では、農地が都市化する中で、村民委員会がどう変化しているかを分析したものである。①村民委員会が廃止され会社と社区が併存、②村民委員会、会社、社区が併存、③村民委員会と社区の併存、の３パターンである。村

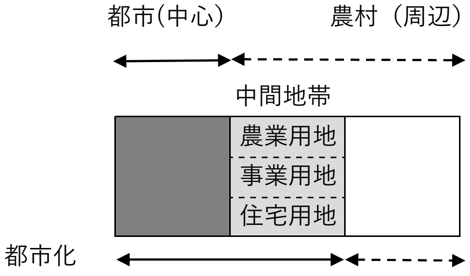
民委員会の存続理由は、都市化されても元農村民へ福利厚生を提供する必要性があるからだとする。

終章において、土地をめぐる都市農村関係は、計画経済期に形成された中心 - 周辺構造のもと、市場化・都市化で変容したため、都市が農村を飲み込むという単純な図式ではなく、多元的な交渉が発生し、その結果現在の都市農村間関係が形成されたことを主張する。

多元的な交渉に影響を与えるのは、国家の土地制度、都市の財政、農村の産業であり、それぞれの情況の違いが農村の都市との競合、協調、対立関係を生んだ。都市農村間の交渉の結果、都市と農村ではない中間地帯を生み出している、としている。

本書の研究を俯瞰してまとめてみると以下の３点であり、図示すれば図１のようになる。

図1　本書の全体像



（出所）筆者作成

1. 土地取引における中心-周辺構造: 土地取引において、都市政府と村の幹部が中心となり、デベロッパーもそこに加わって利益を共有する一方、都市住民と農民は周辺に位置付けられるという構造を持っている。

2. 土地用途による政治過程の多元化: 農業用地、事業用地、住宅用地という異なる用途の土地ごとに、都市農村間の取引過程が多様化している。

3. 中間地帯の生成: 都市化の結果、行政区画上は都市に属するものの、住民組織や土地所有形態において農村の特徴を残す中間地帯が形成されていることを示し、二元構造が変容している。

本書を評価すれば、ミクロレベルのアクターである村幹部、農民、都市側の行動（政治過程）を詳細に見ていること、土地用途ごとに政治過程の類型化に取り組んでおり、そのため都市化の複雑な様相を多角的に把握できていること、三つ目は中間地帯、及びそこにおける村民委員会の役割を整理していること、が指摘できる。

評者は、中国の都市化は空間的都市化が先に進み、制度的都市化が後回しになっていることを指摘してきた（岡本編2018）。都市農村間における行政組織、人の戸籍、土地所有制の違いが、農村が制度的に都市になり切れていない中間地帯を生み出している。評者の制度的都市化の遅れという言葉が、本書の中間地帯という定義によって、さらに都市化の過程が整理できているという点も評価しておきたい点である。

もう一つの評価は、丁寧な現地調査があったことである。

その現地調査によると、東北では、農地を収容した補償費の分配を農民個人に多く分配し、広東では補償費は村民委員会が集団で管理したという。評者は広東と貴州で都市化の話を聞いてきたが、本書にある村民に分配すると無駄遣いし、その後村民委員会と都市政府に泣きつくという話などは評者も聞けなかった話なので非常にリアルであり、本書を概念的な都市化の議論に終始させていない。

ここまで、一方的に良い評価をしてきたが、評者としては物足りない部分もある。それは、都市化による土地の譲渡、それに伴う利益分配はもっとシンプルにとらえることが可能ではないかということだ。

評者の体験では、村の土地に対して「外部からの需要」があるかどうかが利益配分に大きく影響を与えると感じている。単純に言えば、農村の土地が都市から見て価値があれば、その土地価値を知っている農村は交渉に優位となる。知らない場合にはその優位性が生かせない。優位性をもっているかどうかは集団資産が経済利益を上げているかどうかが基準となるであろ

う。

例えば、広東省など経済発展、都市化が早かった地域では、農村の土地への需要（工場、商業施設、出稼ぎ労働者への住宅建設など）が大きく、村民委員会はその不動産業で潤う。この「外部からの需要」により、村民および村民委員会は交渉に有利になる。

反対に、貴州などの発展が遅い地域では、そもそも農村の土地に対する「外部からの需要」はない。あっても上級政府からの都市化要求に伴う道路などの都市インフラ建設による一時的な需要のみだ。つまり企業にとっての進出魅力もなく、他地域からの出稼ぎ者が住むところでもなく、ただ農村地域である。このような場合、農村地域は都市や都市デベロッパーの言われるままに交渉が進むこととなる。

したがって、本書の用地別の多角的な政治過程の整理は素晴らしいものの、土地をめぐる都市農村間の利益配分は、シンプルに農村にある土地への「外部からの需要」の有無によって説明できるのではなかろうか。土地需要がある農村は本書が指摘する中間地帯となる。そこでは村民委員会なり村民委員会が変貌した利益配分会社等が残るであろう。反対に土地需要がない農村は土地が収用された後村民委員会が社区住民委員会に変化し行政区画的にも都市に組み込まれていくことになろう。

さて、最後にこの中間地帯、具体的には「城中村」の存在について、評者の考えを述べておきたい。城中村は、都市が拡大する過程の中で制度的に都市に変換しきれなかった場所である。

城中村は多種多様な人や店が集積する。土地が国有地ではなく農村の集団所有地であるために、土地価格が安く、出稼ぎ労働者、地方から都市の大学に進学しそのまま都市で就職した学生の最初の住居としても魅力のある場所だ。当然、小さな商店や飲食店、それ伴う各種サービスを提供するお店なども始めやすい場所でもある。

城中村は無秩序ゆえの魅力がある。城中村は建物も都市計画にそって作られるというよりも、ある種無秩序に建物が形成されている。細い路地を挟んで、建物が密集しており、消防面での安全性はないだろうが、この路地の狭さや人々の密集度合いが町の魅力を形成している。

このように、城中村は自然発生的な側面があるために、都市として非常に魅力的だ。都市の魅力は無秩序かつ猥雑で多種多様な人や事業が集まっているところにある。

東京葛飾区の立石はせんべろ（1,000円で酔える）の町、のんべいの町として東京のみならず東京近郊からも人が訪れる町である。この町の魅力も狭い猥雑なアーケード街であり、無秩序に形成された飲み屋街である。

この町も安全性を理由に再開発が始まった。均質的な建物が建ち、その中に飲み屋が移ったとしても、多くの人は将来立石の独自の魅力がなくなるだろうと考えている。

これと同じで、中国各地の「城中村」も再開発のうねりに巻き込まれている。制度的にも土地の国有化が進み、村民委員会は社区住民委員会に代わり、制度的都市化が進むだろう。空間的都市化による町の再整備も進むと、見た目は美しい町になるであろう。

しかし本来町は人が自然発生的に集まって住むところのはずである。今後政府の力で都市計画を進める中国では、魅力ある城中村、中間地帯がなくなっていくであろう。この変化を「発展」として喜ばしい気持ちにならず、魅力喪失という寂しい気持ちで眺めているのは私だけではないはずだ。

＜参考文献＞

岡本信広編（2018）『中国の都市化と制度改革』日本貿易振興機構アジア経済研究所

岡本　信広（おかもと　のぶひろ・大東文化大学）